

地御前村出征記念碑

地御前神社の西側に、「皇威輝八紘」の碑が建立されている。この碑は、西南戦争・日清戦争・日露戦争に出征した村民の面影を偲び、民衆の間で軍国主義が一層浸透するように、日露戦争後、大正2年(1913)年建立された。

西南戦争 明治10年(1877)

日清戦争 明治27年(1894) 地御前従軍者 17名

日露戦争 明治37年(1904) 地御前従軍者 68名



地御前村出征記念碑



地御前南町遺跡

昭和 40 年 (1965) 南町の町道を消防貯水槽設置のため、掘り下げていたら、地表から約 3m 下の地層から、縄文土器片・獣の骨・魚の骨・貝類など約 1 万点が発掘された。これは、掘り下げた砂を釈迦堂横に仮置きした砂の中から、地御前小学校の児童たちが見つけ、遺跡発掘につながる。

当時、町役場は遺跡専門家の、広島大学松崎教授に調査を依頼し、縄文時代後期を中心とする前期からの遺跡であることが確認された。

地御前南町遺跡は、広島湾沿岸の遺跡の多くが早期と後期・晩期に属している中であって数少ない前・中期の遺跡を含んだ重要な遺跡であることが明らかとなった。また出土品には縄文時代の人々の暮らしを知るうえで多くの貴重なものが含まれていた。

石鏃^{せきぞく} (ヤジリ)、石槍などの狩猟道具、調理加工に使用された石刃^{いしぼ}、漁網のおもりに用いられた石錘^{すい}、木の実などをすりつぶすのに用いられたと思われる磨石などが出土している。また、焼いた跡のある動物の骨や貝類も出土しており、地御前南町遺跡の在る辺りに、当時住んでいた人々が、ここを拠点として野山での狩りと木の実の採集、海辺での漁業と貝の採集を中心として生活を営んでいたことをよく示している。

特に注目されるのは、石器の材料として遠く大分県の姫島から運ばれた黒曜石が多く使われており、また、土器の特徴にも東部瀬戸内海地域との密接な関係がうかがわれるものがみられることである。瀬戸内海を利用した活発な交流があったのである。

平成 18 年 (2006) に地御前小学校の校庭を掘り下げ発掘調査が行われ、主な出土遺物は、縄文時代の後期から晩期までの土器が多量に出土したほか、どんぐりに似た「シリブカガシ」堅果類の遺存体が大量に出土した。

縄文時代中期 約五千年前

縄文時代後期 約四千五百年前

縄文土器は厚くて黒っぽく模様があって表面がでこぼこしています。

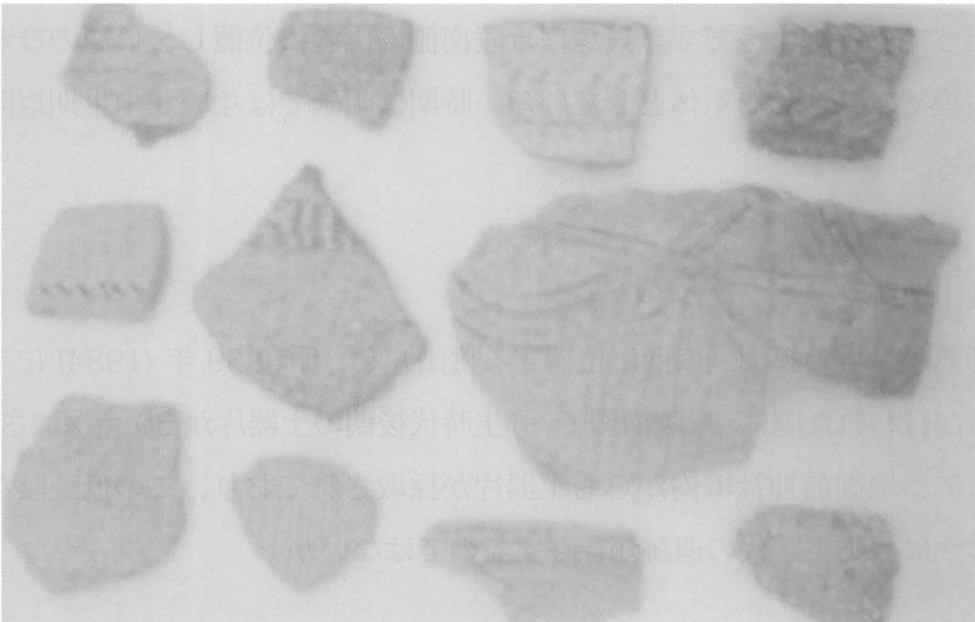
弥生時代前期

約二千二百年前

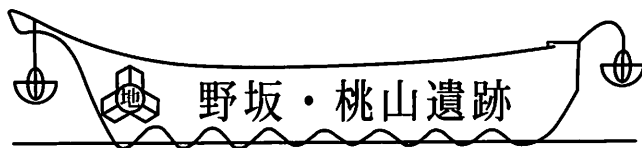
弥生土器は薄く赤っぽくて表面があまりでこぼこしていません



南町遺跡



出土品



野坂遺跡

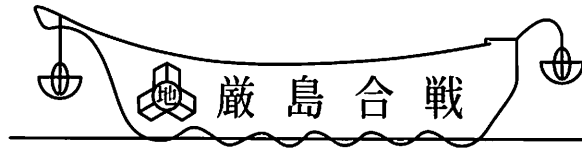
元、逓信病院（現野坂中学校）下の道路、地御前村と宮内村の境、標高15m 切り通し部分に位置する場所で、昭和27年（1952）村道工事中に地表下約10m のところから、工事に従事し、宮内の佐原田に住んでおられた川西政市さんが、瀬戸系瓶子一点、正位の状態で発見された。発見当時、瓶子の中には骨らしいものが埋納されていたといわれ、詳しい状況は定かではないが、地御前村野坂地区は、巖島神社の宮司を勤める野坂家の一族がかかわりのあったところと言われていることから、野坂家一族の者の骨が埋納されたものであろう。

また、その他にも石^{せきぞく}鏝1点のほか弥生土器・土師^{はじききへん}器片が採取されている。また灰^{はいゆう}釉の瓶子は、発見時口縁部は欠損していた。高さ25cm 肩部は最大径16cm、底部径7.5cm、模様は台形状とひし形を交互に表した文様であった。こうした古瀬戸の焼き物の発見地は、中国地方では福山の草戸千軒遺跡が名高く、巖島神社にも立派な古瀬戸瓶子が宝物として伝世されていますが、その数はいたって少ないようです。貝塚は丘陵南側の山麓に位置し、貝層のひろがりはは小規模で、アサリを主体としている。時期は明確ではないが中世期以降の貝塚である。

桃山遺跡

地御前小学校の裏山（南西に位置する桃山）を、昭和59年（1984）に宅地造成工事が行われた際に、丘陵南側で、弥生時代後期の土器片が30点採取された。

さらに、地御前神社境内からも土器片が採取されており、この低丘陵をとりまくように、弥生時代の遺跡が存在するのではないか。



ささいぐん
佐西郡の山城—神主家跡目争い—大内氏安芸国支配—桜尾城—大内義興死亡
—藤原神主家滅亡—陶晴賢謀反（大内義隆 長門で切腹）—折敷畑おしきばたの合戦—巖島
合戦

天文23年(1554)5月折敷畑の合戦から翌年の巖島合戦にかけて約1年半の間、佐西郡（廿日市・大竹・佐伯郡一帯は、中世においては佐西郡と呼ばれていた）は毛利と陶の対決の主戦場となって各所で戦いが行われた。折敷畑の合戦以降も陶方の勢力下にあった山里（佐伯町・吉和村・湯来町白砂一帯）では、軍事的緊張状態が続いたものと思われ、「森脇覚書」によれば陶方によって高森城が築かれ、対抗して毛利方も向城として狼城を築城している。また、大野にある門山城は大内氏が安芸進出の拠点とした城であり、毛利氏はこれを「破却」して抵抗勢力の根拠を奪っている。

中山城（佐伯町河津原）・溝迫城（佐伯町友田）はこの時期新たに築城されたものかどうかは不明だが、郭の周囲に堅堀・横堀、あるいは畝状堅堀群を設けて厳重に固めており、当時の緊張状態を彷彿させる築城となっている。

この頃、佐西郡は神領と呼ばれ神主家の本拠として桜尾城が築かれていた。神領衆は土着した神主家の一族や神主家と主従関係を結んだ在地の土豪などから構成されていた。巖島の神領であった佐西郡は、そのころ隣接する大名勢力との兼ね合いに悩んでいた。東は安芸の武田氏、西は周防の大内氏。二つの勢力争いの中に巻きこまれるしかなかったのである。藤原教親のりちか（応仁の乱の西軍として参加。神主であると同時に武士的性格を兼ね備えていた。毛利一族長尾氏の出身で藤原氏の養子として神主家を相続した。）及び宗親の死後、神主は宗親の子、興親に移った。だが興親には子どもがなく京都で死ぬと国元で跡目争いがおこった。これが争乱の始まりだった。

（洞雲寺は長享元年（1487）藤原教親および子の宗親によって建てられた神主藤原氏の菩提寺である）。

西軍

小方加賀守

藤掛尾城

新里若狭守

大内氏

神主親族リーダー

城

神領衆

応援の大名

東軍

友田興藤

桜尾城

宍戸治部少輔

武田氏

友田興藤と小方加賀守はともに神主に補任されることを望んで大内氏に訴えたが、大内義興は神主を置くことをやめ、神領を自分の支配下におき、桜尾城には大内側の者を城番に置くことを強行した。これに対し、許せぬと友田興藤が挙兵すると武田氏も加勢し桜尾城を攻め落とした。興藤はひそかに出雲の尼子氏（尼子経久）に加勢を求め、尼子氏は毛利・吉川氏も従えて南へと進軍し、大内氏の拠点鏡山城を北から攻略するのに成功。これに対し大内義興が反撃を開始。義興は息子義隆を伴い瀬戸内海を進んで、興藤方の番衆を厳島から追放すると、厳島を占領し、ここを本陣とした。しかし桜尾城を大内軍は攻めあぐね、陶興房も講話策をとった。興藤も武田氏や尼子氏の救援が望めぬまま窮地にたっていたため、講話策を呑むことにした。（友田興藤の兄の子で藤太郎を厳島神主とすることで講和は成立した。）しかし興藤はおもしろくなかった。大内義興は山口に帰らず本陣も解けなかったのである。一方神主家の実権は相変わらず興藤が握っていた。

大永 5 年 (1525) 大内義興は安芸国を支配すべく進軍。大将は陶興房。武田氏を破り、本拠の金山城まで迫った。しかし大内氏を支援するため派遣されていた大友軍が急に帰国したため武田氏を生き返らせることになる。そして大内義興が突然の病にたおれる。やがて山口にて亡くなる。跡を継いだ大内義隆は陶興房の子、陶隆房（後の晴賢）の活躍もあって備後や筑前に勢力を一層広げていった。

桜尾城、友田興藤は 10 年間中立を装って我慢し続けたが天文 10 年、興藤の不満が爆発、尼子氏とひそかに手を結び大内氏に反旗を翻した。まず厳島から大内軍を追放した。ところが援軍に来るはずだった尼子軍は、毛利氏の郡山

城を包囲したが、宮崎長尾の合戦で毛利氏に敗れてしまった。安心しきっていた友田興藤は、大内軍の船団に再び厳島を奪われ五日市城にたてこもり広就も切腹し、300年続いた藤原姓神主家は滅亡したのであった。大内氏は杉隆真（景教）を神主に、桜尾城には大内の家臣鷲頭治部少輔を城督として置き、大内氏の本格的な安芸国支配が始まった。

しかし、大内義隆は天文20年（1551）陶晴賢の謀反にあい、長門の大寧寺で切腹した。陶軍は挙兵に先立って厳島を占領し、桜尾城挙中に収めた。

天文23年（1554）5月12日陶討伐の為、毛利元就は進軍を開始した。まず、金山城・己斐城・草津城を攻略し、石道（石内）と五日市で大内方の兵を破り廿日市へ進んだ。当時、桜尾城には大内・陶氏の家臣などが在番していたが、説得に応じて城を明け渡した。更に毛利軍は厳島に渡海し、陶方家臣を追放して島を占領した。

これに対して、石見津和野三本松城の吉見正頼（大内義孝の姉婿）を攻撃していた陶晴賢は、家臣の宮川甲斐守に兵を援け、安芸に向かわせた。宮川甲斐守は途中、周防玖珂郡の山代衆などを合わせ、毛利方の本陣がある桜尾城を見下ろす形で、戦略的に優れた折敷畑に陣を敷いた。毛利氏側はやや苦しいと思われる対陣に対し、6月1日、小早川隆景の軍は海辺より宮内・地御前の方向に向かい、七尾の西方から敵の本陣に突進する。吉川元春の軍は折敷畑の山北に進出して、敵の本陣に側面から攻撃する。宍戸隆家・福原貞俊の軍も折敷畑の山北に迂回し、敵の攻撃に乗じて側面からこれを襲撃する。元就及び隆元の本隊は本道筋より正面攻撃を賭け勝敗が決し、宮川甲斐守自刃。宮川勢は7千人の軍勢で死者7百50余人、これに対して毛利勢は3千人の軍勢で死者70余人、これが一日で終わった折敷畑の戦いでした。又毛利軍が出発しようとしたとき、厳島神社の柵守野坂房頭の使者石田六郎左衛門が来て、御供米と巻鮭を元就に献じました。元就は大いに喜び、「厳島神社の加護によって今日の戦いは必ず勝てる」と将士を激励したと陰徳太平記、その他に書いてあります。

弘治元年春から毛利方は厳島有の浦宮尾に築城を始める。宮ノ城とも宮尾城

とも言う。(現在連絡船の着く宮島棧橋の南の丘) 当時は三方が海に臨んでいた。城将として己斐豊後守と新里宮内少輔が選ばれ約五百人の兵が従った。この両援は旧大内氏の己斐城・桜尾城の守将で義隆滅亡後は陶方であったが、天文23年、毛利方に降った。元就は豊後守に、忠勤を励むことを感謝し領地を与えることを約束していました。

宮尾城は5月13日陶軍の攻撃、7月7日の陶方白井越中守賢胤の攻撃にも落ちず。この争いが陶方全軍をあげての渡航となるのです。晴賢は厳島神社での秋の法会の終了を待って、9月21日晴賢は、警固船1,200余隻に分乗、岩国の今津・室の木から出航、厳島に上陸しました。塔の岡(千畳閣)を本陣とし、兵船は長浜・有ノ浦から須尾浦にかけての海岸に碇泊、船首を廿日市・草津の方に向けて警戒しました。

なぜ陶晴賢は厳島に陣をはったのか？それは、厳島は海上交通の要であり軍事上の重要地点でもあった。また、厳島が神の島であり、古来、一切の不浄・汚穢を許さないという信仰だから神社の中で合戦が起る筈がない、という所謂良心的な観測があったのでは。元就も信仰の厚かった人と言われていますが、同時に信仰心を利用した人とも言えます。

陶軍は、まず三浦房清を将として一気に宮尾城を攻撃、大勢は落城近しとの情勢で元就は吉田郡山城を3,500騎で発する。従う者は長男隆元・次男元春・三男隆景をはじめ、国人衆及び毛利譜代の者共。この厳島合戦は簡単に言うと海を挟んでの戦いですから水軍の戦力が大きな要素であることは明確です。陶方には防洲の海賊衆が味方し、毛利方には太田川河口の警固衆が味方する。しかし毛利方の水軍は劣勢で、瀬戸内海水軍の専門家である海賊衆、三島村上、即ち因島・来島・能島の村上氏がどちらに味方するかは大きく戦いを左右したのです。9月26日村上の警固船2~3百艇が音戸の瀬戸を経て、海賊衆は廿日市の沖に碇を入れる。野島武慶・久留島通康・村上宗勝とその一門家子郎等(野島村上)が毛利に味方したのです。

ではなぜ村上水軍は毛利方に味方したのか？それは陶晴賢が大内義隆を滅し

た後、巖島でそれまで村上衆が取っていた通交の警固料を禁止し、村上軍の恨みがあったと考えられます。

そして、毛利元就は地御前の火立岩という小山に本陣を敷くことになる。9月晦日の夜、風雨に乗じて火立岩から出航、包が浦に上がり博奕尾を越えて夜襲を掛けた。陶軍は敗れ、陶晴賢は大江浦で自害した。桜尾城主として桂元澄が置かれ、次に毛利元晴・秀元へと受け継がれた。洞雲寺には今も友田興藤・陶晴賢・桂元澄・毛利元晴の墓が残っている。

巖島合戦に勝利を収めた毛利氏は、弘治3年(1557)には大内氏を滅ぼし周防・長門を領国化し、戦国大名へと成長していく。



三光院は、昭和の初期、弘法大師を深く崇敬した智妙法尼ちみょうほうにが大師の靈告を受けて、廃寺より迎えた金剛界大日如来の尊像を本尊とし、弘法大師も合わせ祀り金剛院と号して、山口県に開山されたのが始まりである。

昭和 28 年広島県地御前の現在地に移転する。この地に鎮座する地御前神社は、神体島である巖島の本土ようはいより遥拝するための社で、神社創建の理由は、島全体が御神体で古代は人が常住できず、天候によっては渡航して祭祀が出来ないため、常に祭祀ができるよう巖島神社の外宮として創建された。地名も「本土の地にある神の御前」の意味から地御前となる。伝説によると平安時代に、本宮巖島神社と外宮である地御前神社に読経供養するための別当寺と供養僧の諸寺が弘法大師によって開山された。この時、外宮と別当寺、そして、地御前さんぼう しゅうせい一帯の鎮護としてこの地に塚を築き、仏法僧の三寶と衆生・寺社・土地・屋敷・かまど竈を守る守護神である三寶荒神さんぼうこうじんを勧請して祀られる。鎌倉時代に入り別当寺と供僧の各寺は宮島に移転したが、荒神は、外宮と地御前の守護神でもあったので残された。しかし、時代の返還により塚は荒れ果て忘れ去られていたが、この由来を知っていた智妙法尼が由緒ある塚の荒廃を嘆いて当院を塚の鎮まる地に移転し、荒神を当院の鎮守とし篤く祀る。山号は塚のあるあたりの字名が巖島大神の縁から大神でもあったことと、塚が巖島大神の外宮いつくしまおおがみの守護である由来から大神山と号し、院号を金剛院から三寶荒神の威光にて守護とするとの意味で三光院と改称。旧、御室御所おむろ ごしやうそうほんざんにん なじもんぜき総本山仁和寺門跡の直末寺院となり真言宗御室派に属する。当院の弘法大師の靈驗あらたかなことから地御前ちみょうほうにの大師さんと親しまれ、荒神様のご利益も広大で、また、法尼の法力と慈悲溢れる人柄も相まって参拝の信徒は跡を絶たず繁栄する。法尼の遷化後、現住職の第二世隆海僧正が跡を継ぎ、二人の弟子と共に一味和合の仁和の心を旨に精進し、布教と寺門興隆に尽くす。毎月二十一日の大師祭のご縁には多くの方々が参拝されている。

えんき
縁起……………神社や寺院の由来又は靈験の言い伝えを文章化した記事

ちみょうほうに
智妙法尼……………出家して仏門に入った女子のこと

さんぼう
三寶(三宝)…仏・法・僧 → 耳・目・口 → 身・口・意(心)

この世を表わす、土地・火・水を表わす三宝荒

神を表わす

しゅうせい
衆生……………すべての生命を表す

かまど
竈……………昔家の中に土で作ったご飯を炊くところ

いつくしまおおがみ
巖島大神……………地名

さんぼうこうじん
三寶荒神……………土地・火・水をつかさどる神様を表す

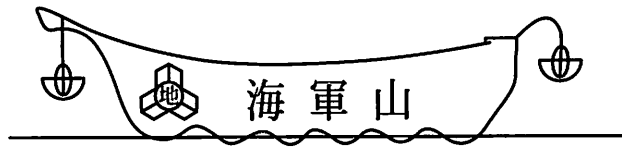
おむろ ごしょうそうほんざんにん なじもんぎ
御室御所総本山仁和寺門跡……………京都にある真言宗御室派総本山

仁和寺の最高の位を表す

広島新四国八十八ヶ所 第78番霊場 三光院



三光院



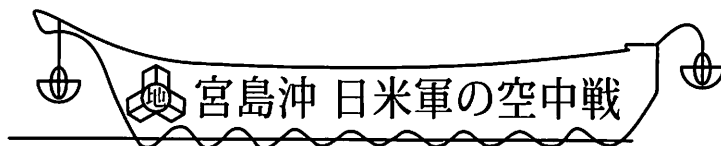
昭和 16 年 (1941) 12 月 8 日太平洋戦争開戦、昭和 17 年 4 月 18 日本土、東京が初空襲を受けた。

その後、名古屋・大阪など全国主要都市が空襲を受ける。海軍では本土の防空体制を強化するために、小高い山（後平山）（現在のキラキラ公園）に防空監視所（正式名称不明）の建設を進めた。

施設の概要

1. 聴音機（大型の集音器）現在の公園の西側にあった丘
2. 探照灯（大型のサーチライト）現在の公園の東側にあった丘
3. 火力発電所、探照灯の電源として、毘沙門堂横の余田公園の場所に、木造の建造物を建築
4. 煉瓦造りの建造物（指令室があったと思われる）
聴音機と探照灯の中間の尾根に建造物
5. 兵舎（兵士、約 20 名が居住できると思われるくらいの木造建造物）
煉瓦造りの建物から南側に下がったところに建築

監視所から敵機襲来の情報で、高射砲陣地から砲撃したと思われるが、五千 m から一万 m の上空を飛ぶため B29 には砲弾は届かなかった。戦後、海外からの引揚者が一時的に、兵舎の建造物を使用していた頃から、誰ともなくこの山を「海軍山」と呼ぶようになった。



宮島沖 日米軍の空中戦

昭和 20 年 3 月 19 日米軍は空母 16 隻から、持てる全ての艦載機を発進させ、呉軍港への猛爆撃がはじまる。艦載機の中の一部・グラマンヘルキャット戦闘機 7 機が地御前に向って飛んできた。それを迎撃したのが陸軍小月飛行場を発進した新鋭の隼戦 2 機である。米軍機の標的は満員の客を乗せた上りの旅客列車であった。やがてグラマン 4 機と隼 1 機の激しい空中戦が繰り広げられ、身軽になって戦闘をするため積んでいた爆弾 (25K) を投下して真っ青な上空を急上昇と急降下を繰り返し、機関銃を撃ちました。その爆弾 1 つが中谷家 (4 丁目 1-27) に被弾し、5 名の方が亡くなられた。列車は安全なトンネルで急停車して救われたが、隼 1 機が撃墜され厳島の長浜にある宮島国民学校の前の海に落ちた。勇敢な将校は九州大分県出身者の桜木大尉であった。

隼が発射した戦闘機用 13mm 機銃弾は地御前(扇園)にあった旭兵器工業(株)で製作したものである。機銃弾の多量な薬莢が、現野坂中学校の前、野坂・砂島に落ち、地域の方がバケツで拾い集め憲兵に渡したとの事である。尚、戦争中は、厳島で記念写真は撮っても良いが、神社・五重の塔は写しても、弥山は秘密の場所とされ全て消されている。

米軍が「真珠湾の - - - -」とした呉空襲の回数は、3 月 19 日以降、主な空襲だけでも 6 回を数え、2400 人 (2391 人) の死者を出した。真珠湾攻撃での米国側の死者は 2000 人であった。

相覧場と火立岩

鱒浜（阿品字名）一帯を昔の人は、相覧場と言っていた。毛利元就が、この場所で、厳島を望見して戦略を立てたと言い伝えられている。これにより、勝覧場の地名になり、「勝」が「相」に変わったのは、「相」（アイ）は海辺を意味する言葉で相覧場と名前が付けられるようになった。火立岩より毛利元就が大内義隆の委託（遺言）を受けて陶晴賢を討たんとして、精兵 3000 人を率い吉田城（高田郡）を出発して、御建山みたてやまの上に本陣を構え進めた。火立岩から、弘治元年 9 月 (1555) 晦日の夜、風雨晦日の宴に乗じて、元就ここより出船した。連勝の鼻（沖山）では、対岸厳島根に大縄をうちかけ、軍船がこの縄をつたい夜陰に乗じて櫓の声をしのばせ、一気に厳島に押し渡し奇襲攻撃を賭け勝利した。この場所は、明治 25 年 (1892) 頃までは、花見時、沖山で鴨を獲るため遊山者がすこぶる多かった。また、昭和 26 年 (1951) 第 6 回広島国民体育大会の射撃会場であった。

この海岸には、有名な岩が多くあり、蓬萊岩・隠れ岩・平氏岩・長岩・火立岩ほうらいいわがあり連絡船（漕ぎ船）の発着場として利用されていた。



火立岩



山陽鉄道が、明治 27 年 (1894) 糸崎から広島まで開通し、翌年から広島・徳山間の工事に入る。当初、駅の設置される予定は、己斐・廿日市・地御前・玖波になっていた。特に地御前は宮島厳島神社と縁とゆかりのある地として候補に上がっていたが、明治 30 年 (1897)9 月 23 日に開通式が挙行された時には、設置駅は横川・己斐・五日市・廿日市・宮島・玖波・大竹と変更になった。地御前には、耕地がないことにより、村民が反対したといわれている。山陽鉄道は、明治 39 年 (1906) に国営鉄道山陽本線に移管された。大正 13 年 (1924)11 月 30 日に五日市・廿日市間、昭和 3 年 (1928)6 月 29 日に廿日市・宮島間が複線化された。

昭和 63 年 (1988)4 月 3 日に宮内串戸駅が開設される。

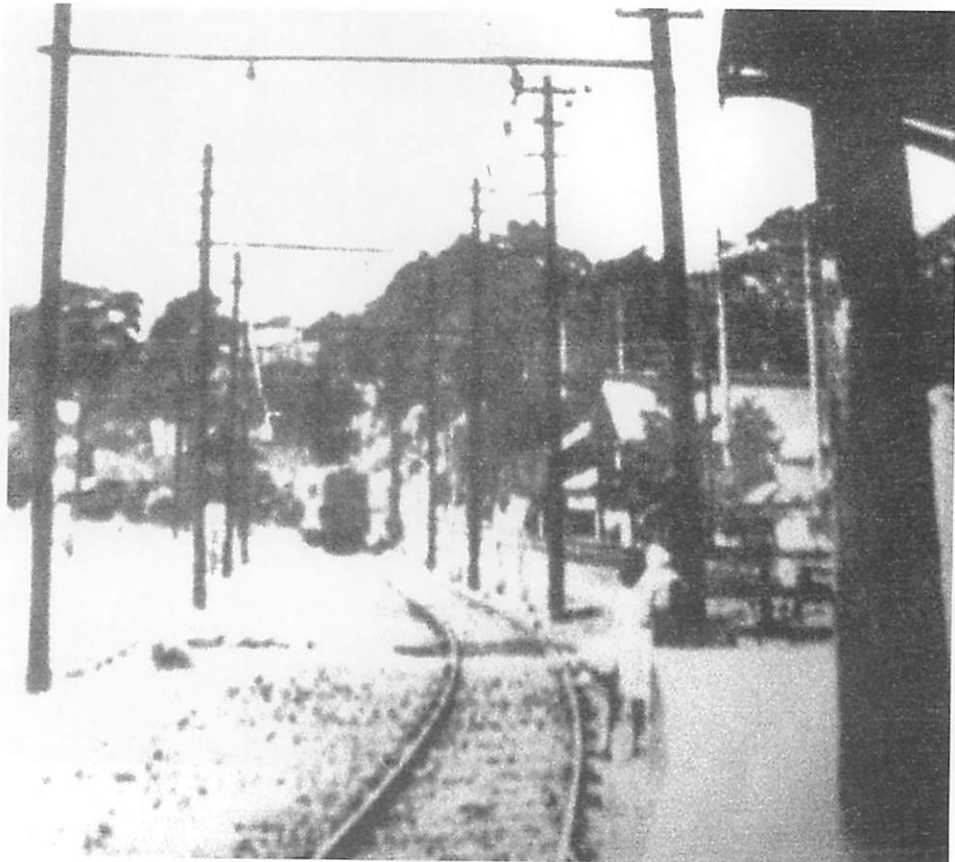


山陽鉄道

広島瓦斯電軌

電車宮島線は、宮島までの観光客を誘致するための電車を企画したもので、大正 14 年 (1925) 廿日市・地御前間、大正 15 年地御前・新宮島間 (阿品)、新宮島から宮島口まで開通したのは昭和 6 年 (1931) です。路線が宮島口まで開通されるまでは、宮島に渡る渡廻船 (連絡船) は、地御前で下車して、徒歩または、乗合自動車で新宮島栈橋行きに乗り宮島に渡航していた。当時の料金は、己斐から地御前間が 27 銭、地御前から新宮島栈橋間の乗合自動車が 9 銭、新宮島から宮島までの連絡船 15 銭。合計 51 銭であった。今日の物価に換算すると約 680 円となり割高であった。

昭和 19 年 (1944) 廿日市駅から宮島口駅間が単線になった。これは的場から皆実三丁目 (現在皆実六丁目) を複線で開通させるためであった。



広電単線

地御前海運輸送と旅客船

江戸時代、現在の観音堂から地御前農協までが地御前港であった。旧公民館は浅野藩の年貢米倉庫で、明治27年(1894)頃の港には、150石積み以上の船が4隻、100石～150石積みの船が4隻、50～100石積みの船が6隻出入りしていた。これは、甘日市港の廻船数を上回るもので、江戸時代末期から明治初期にかけては、甘日市港を上回る発展を見せていたが、明治後期には、地御前港への商船の出入りは途絶え漁船留として使用されるようになった。

旅客輸送は、江戸時代から甘日市港と地御前港には渡廻船や番船がおり、宮島や能美島と結んでいた。

明治24年(1891)頃には、地御前棧橋(阿品)から宮島への連絡船が10数隻いて、乗客運賃、1人5銭・2人8銭・3人9銭・4人10銭・5人12銭。但し、暴風・夜中は水夫(船頭)を1人増すごとに倍額になる。

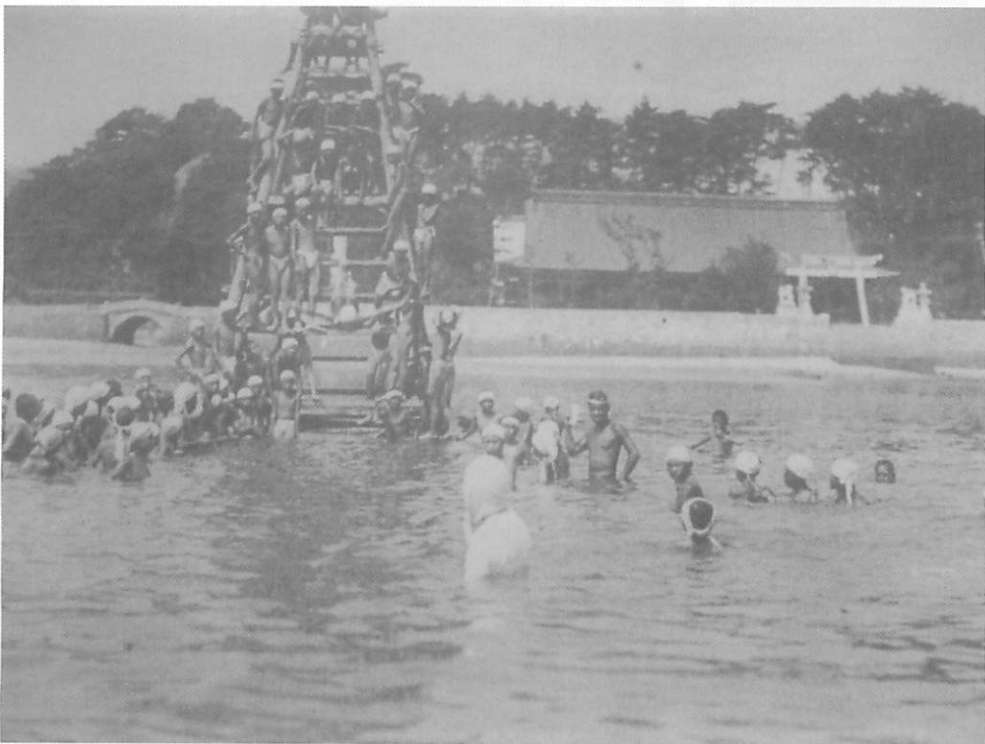


地御前海運と旅客船

明神が浜と海水浴場

地御前神社前の明神が浜は、夏場になる地御前海水浴場となり、遠浅で砂浜もきれいな海水浴場で、シーズン前になると、小学校の高学年の生徒が、砂場を掃除して海水浴場の準備をしていました。海水浴場には、貸ボート屋、飛び込み台も設置され、「地宮館」が経営する大きな栈敷と、宿泊施設や大衆浴場がありました。海水浴シーズンに入ると、広島電鉄の臨時停留所「地御前海水浴場前」に電車が止まり、広島市内や山間部から大勢の海水浴客で賑わいました。また、学校単位や子ども会の臨海学校も開かれ、小学校や地御前神社が宿泊の場となり一日中楽しめる場所でした。

地御前海岸は、干潮時には「あさり」「マテ貝」「大貝」堀で地元の人や近隣の人で埋まります。少し沖に出ると「海藻」に魚が群がり、多くの人が引網を引く風景を見ることが出来ました。



明神が浜海水浴場

地御前の港と波止場

地御前の港は観音山から現在の農協までが港で、観音山側が漁船の船着き場であった。明治27年(1894)頃まで、50石積みから150石積み以上の商船が20隻係留され、出入りは廿日市港の廻船数を上回り発展をなしていた。渡廻船や番船は、能美島や宮島を結んでいた。

文化13年(1816)には、旧公民館跡地に「浅野藩年貢米蔵」があり、頻繁に大阪通いの商船が出入りし、現農協の裏に大井戸があり、その横の胡神社の祠に船員たちが安全を祈願していた。

地御前村は、鉄道や道路での拡張に伴い、明治41年(1908)に、地御前村民の有志により、港周辺の埋め立て造築が始まった。造成後、新開地を宅地として売り出す計画で、その時期、石垣積みの波止場が出来、入り江には、雁木・焚き場があり港として十分な役割をはたしていた。



地御前の波止場

地御前の牡蠣養殖

地御前の「牡蠣」は全国的にも有名で、美味しいと評判である。広島牡蠣の養殖の歴史は古く 100 年以上の歴史がある。地域における牡蠣の養殖は、文久元年 (1861) 頃、廿日市の山代政次、三輪弥助に始まったと伝えられている。養殖は太田川の河口域に発達した平潟と河川水がもたらす栄養塩（プランクトン）によって成り立つ。牡蠣の養殖は、昔は、「地蒔き」「牡蠣ヒビ」「杭打ち式吊り下げ」方式が一般的で、昭和 9 年に吉岡力男、梶上利夫ら 20 名の青年会（漁業青年団）を結成し、新しく「やぐら式の垂下式」養殖法に取り組んだことから大きな発展をした。

牡蠣養殖は種付けから始まり、ホタテ貝の殻を種付け場に吊るして待ち、再度種牡蠣を通し換えて筏に吊るし換える。牡蠣が食卓に並ぶまでに、2 年物 3 年物と日数がかかり、衛生面においても気を使っているとのこと。そうした、品質・衛生面などが評価され、昭和 52 年第 16 回農業祭に参加し、水産部門において最も優秀であるとして、地御前漁業協同組合青年部が天皇杯を受賞した。

瀬戸内牡蠣は、東北辺りの牡蠣に比べ牡蠣殻の肉厚が薄く焼き牡蠣に適しているため牡蠣ステーションが増えてきている。



牡蠣筏

地御前の漁業

瀬戸内沿岸の地御前沖の漁場は、宮島付近を中心に東西に広がり、特に小魚の漁場として知られ村人の大半が漁業に従事していた。

昔から、網を仕掛けた小舟が櫓を操って行う漁業が盛んで、「うたせ網」「ボラ釣り」「海老網漕ぎ」「鯛網」漁など。そのうちの、鯛網漁は、漁夫を大勢雇い多くの船が港を出航する様は壮絶で、地御前では、吉岡・世田・磯辺の3軒が網元でした、漁は9月中旬から10月下旬の1か月余りが最盛期で、漁法は引網式、福山軒の浦の鯛網と同じです。網を積んだ2隻の船が最初の1番漁の場所を3軒で決め漁に出る。大漁の時は、大漁旗を掲げ丘（陸）から双眼鏡で見て釜焚きの準備が始まり、鯛の荷揚げを待つ。

鯛の茹で揚げは、広場の「むしろ」の上で干され「イリコ」となる。干されたイリコの上を、子供たちが「小イカ」や「小魚」取りに入っ、「イリコ」を踏みつぶすのでよく怒られたのである。「鯛網」漁も昭和初期までが最盛期で、漁船も大型化したうえに、機械化されて漁法も変わり漁場も荒れ、今まで栄えた地御前の「鯛網」漁も次第に姿を消し、漁師も牡蠣養殖に力を入れるようになった。

「網引き唄」 廿日市町の民謡から

♪ 宮島よいとこ朝日を受けて
弥山おろしがそよそよと
弥山鳥が新町に下りて
金も持たずに買う買おう

(新町は大正期まで游里の地名である。)



イワシ水揚げ

地御前の盆踊り

地御前の盆踊りは、歴史も古く江戸時代後期 150 年来の伝統ある踊りで、太鼓・横笛・三味線・音頭に合わせて耳繰り踊りと一般の人は言っている。手の上げ方足の運び、優雅でしなやかな踊りで、豊年踊り・供養踊り・大漁踊りとして踊られてきた踊りのことである。昭和 30 年 (1955) 頃までは、年に 2 回浜じょうと町じょうで、浜じょうは、新盆の 8 月 15 日、勝谷酒造の前で早朝より木製櫓の組み立て準備をして、夕方になると前踊りとして宮内村の天王社で踊り、20 時頃から本格的に地御前踊りが始まる。踊りの輪が広がり、音頭の唄声と太鼓に合わせて、♪踊るバカたれ、観る奴阿呆、太鼓たたきの調子もの♪と踊り子は囃子をつけて歌っていた。小路から入れ替わり立ち替わり、浴衣姿に雪駄仮想衣装で夜が明けるまで踊り続けた。

町じょうは、旧暦の 8 月 15 日、竹本米店前で、19 時頃から肌寒いなか夜中まで踊っていたのを覚えている。地御前の盆踊りは有名で、県の盆踊り大会、西条の八本松や郡の盆踊り大会にも参加していた。平成の始め頃は、廿日市の 4 月「桜まつり」9 月「豊年祭」に参加していた。最近では、伝統を継承してゆくために、地御前保育園「夕涼み会」地御前小学校「運動会」でアトラクションとして児童と一緒に披露している。また、地域の夏祭りでも地御前踊りが踊られている。



盆踊り

とんど祭り

とんど祭りは、古くから伝わる伝統行事で、昔は年の初めの 1 月 14 日に開催されていた。地域の方が前日に雑木や竹を切り、田んぼに櫓を組み立て、竹の枝に書初めを吊るすことで、字が上手になるように願う。また、古いお札や破魔矢・新年のしめ飾り・門松など積み上げ、今年の年男・年女にて点火される。点火されると炎が燃え上がり竹のはじける音で観衆の拍手喝采。炎がおさまるのを待ち、鏡餅を焼いたり、竹筒で酒を沸かしたりして無病息災をお願いする。昔は、とんどで焦げた竹を家に持ち帰り床下に置くと、火災の魔除けになるといわれたものである。古くは各地で行われていた。とんどの歴史は約 150 年続けられている。



とんど

秋祭り俵もみ

地御前村の秋祭りは、10月の18・19日（中の九日）と定められていた。昭和31年（1956）廿日市5か町村合併以来、第二土・日曜日が秋祭りと定められた。地御前村の秋祭りと言えば「俵もみ」。昔は、東側の浜方・西側の町方に分かれ、青年団用と子ども用各1台ずつ出して競り合った。地御前の「俵もみこし」の始まりは古く、浜の櫓は、地域の大工が製作し150年来の歴史があり、また、町の櫓は立派な彫刻入りの作りで、地御前の有名な宮大工 中谷新七氏の作で100年以上前の物と言われている。秋祭りが近づくと、櫓を米ぬかや茶殻で丁寧に磨き、米俵を組み込む（亀の甲編）など、連日の作業が待っている。本番が近くなると、足慣らしをして本番を迎え、当日、本番には地御前の氏神様大歳神社においてお祓いを受け、町に威勢のいい音頭で練り歩く姿は勇壮な限りである。最近では、担ぎ手は揃いの法被と白足袋を履いて担いでいるが、昔は、「長じゅはん」に黒帯を締めて担いでいた。音頭出しも、それぞれ足並みに合わせて、自作の詩と節回しで、周りの観衆を楽しませてくれた。



俵もみ

出発担ぎ出す前の木遣り一声（一般的な文句）

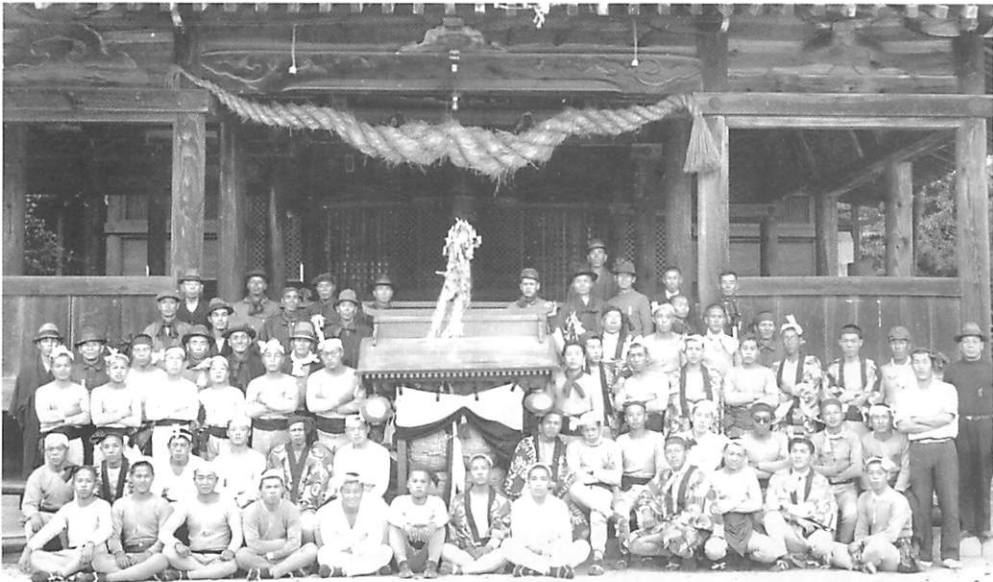
♪ ヤーレ かかれどっと一度にや コンヤレシヨ
声さえあればしたもんじゃ いいどとなればごめんやで
長口上は道のさまたげ、サア若い衆さん上げてくだされ

流し歌

♪ 揃うた、揃うた若い衆が揃うた稲の出穂よりや
またも良く揃うた

ご祝儀の返し木遣り

♪ ヤーレ 又もしよもかや ありがたや花の御礼申しませう
地御前の「俵もみ」は、昭和51年(1976)5月3日 第2回花の
祭典フラワーフェスティバルに出場



俵もみ(その昔)